

ハンドブック

出雲国風土記

島根県古代文化センター

風土記を学ぶ

出雲国風土記全体について本文を掲載し、解説した本には、以下のようなものがあります。

- ・加藤義成 校注『出雲國風土記』
松江今井書店
- ・萩原千鶴 全訳注『出雲国風土記』講談社
- ・島根県古代文化センター編
『解説 出雲国風土記』今井出版

風土記を訪ねる

[出雲国風土記の内容を紹介した博物館]

- ・島根県立古代出雲歴史博物館
出雲市大社町杵築東99-4 電話 0853-53-8600
- ・島根県立八雲立つ風土記の丘展示学習館
松江市大庭町 456 電話 0852-23-2485

[出雲国風土記登場地について]

風土記に登場する県内約130か所について、案内の標柱を設置しています。



発行 島根県教育委員会

編集 島根県古代文化センター

〒690-8502 島根県松江市殿町1番地

電話 0852(22)6725

出雲国風土記の神話・説話を読む

『古事記』や『日本書紀』に匹敵するほど古く、古代出雲についてどの歴史書よりもたくさん情報がある『出雲国風土記』。誰もが知りたい、古代出雲の謎に迫るための基本文献と言ってもいいでしょう。

『出雲国風土記』の全体を紹介する前に、主立った神話・伝承を紹介してみよう。

国引き神話

壮大な国土創世神話 意宇郡

私たちの住んでいる国土はどのようにできたのだろうか？ だれもが一度は想像を巡らすであろう疑問について、『出雲国風土記』は『古事記』や『日本書紀』とは違った神話をのせています。現在、われわれが国引き神話と呼んでいる、出雲国の成り立ちを語った神話です。

国引き神話のストーリー

国引き神話とは、直接は現在の松江市にあった「意宇」という地名を説明した神話です。

八束水臣津野命は、出雲国をみて八雲立つ出雲国は若くて小さい国だ、大きな国にしようと思ひ、新羅をみると国に余りがあるの、大きな鋤で国を切り分け、しつかりした網を結びつけて引き寄せよう、と引いて引き寄せた。これが「八穂米支豆支の御埼」(今の出雲市大社町など島根半島西部)である。こうして各地から国の余りを引き寄せ、つなぎ合わせ、その仕事がおわったとき、「おえ」と引いて杖を衝いた。その場所が杜(もり)になって今も残っている(意宇杜)。

そして、そのとき引いた網は、「蘭の長浜」(出雲市西部の海岸線)と「夜見島」(鳥取県の弓ヶ浜半島)で、つなぎ留めた杭は、佐比売山(三瓶山)と火神岳(大山)である。



変わらぬ国土と神話の舞台

国引き神話は実際の出雲の地勢から想像力を膨らませたスケールの大きな神話で、実際に出雲を訪れるとだれでもその舞台を目にすることが出来ます。そして奈良時代において、出雲のような日本列島の特定の地域の成り立ちをまとめた形で記した神話は、この国引き神話が唯一なのです。

リズムミカルな口承文芸

『出雲国風土記』の原文は、非常にリズムミカルで躍動感にとむ名文です。おそらく口づてに伝えられた神話をそのまま文章にしたのでしょう。音読して古代出雲びとの神話世界を追体験してみよう。

国引き神話 全文

意宇郡条

意宇と号くる所以は、国引き坐しし八束水臣津野命の詔りたまひしく、「八雲立つ出雲の国は、狭布の稚国なるかも。初国小く作らせり。故、作り縫はな」と詔りたまひて、「拷衾志羅紀の三埼を、国の余ありやと見れば、国の余あり」と詔りたまひて、童女の胸鉤取らして、大魚の支太(鯉)衝き別けて、波多須支(幡薄)穂振り別けて、三身の綱打ち掛けて、霜黒葛間耶聞耶(緑るや緑るや)に、河船の毛曾呂毛曾呂に、「国来、国来」と引き来縫へる国は、去豆の折絶よりして、八穂米支豆支(杵築)の御埼なり。かくて堅め立てし加志(杭)は、石見国と出雲国との堺なる、名は佐比売山、是なり。亦、持ち引ける綱は、蘭の長浜、是なり。亦、「北門の佐伎の国を、国の余ありやと見れば、国の余あり」と詔りたまひて、童女の胸鉤取らして、大魚の支太衝き別けて、波多須支穂振り別けて、三身の綱打ち掛けて、霜黒葛間耶聞耶に、河船の毛曾呂毛曾呂に、「国来、国来」と引き来縫へる国は、三穂の埼なり。持ち引ける綱は、夜見島なり。固堅め立てし加志は、伯耆国なる大神岳、是なり。「今は国引き訖えつ」と詔りたまひて、意宇杜に御杖衝き立てて「意恵」と詔りたまひき。故、意宇という。

る国は、多久の折絶よりして、狭田の国、是なり。亦、「北門の良波の国を、国の余ありやと見れば、国の余あり」と詔りたまひて、童女の胸鉤取らして、大魚の支太衝き別けて、波多須支穂振り別けて、三身の綱打ち掛けて、霜黒葛間耶聞耶に、河船の毛曾呂毛曾呂に、「国来、国来」と引き来縫へる国は、宇波の折絶よりして、閑見の国、是なり。

亦、「高志の都都の三埼を、国の余ありやと見れば、国の余あり」と詔りたまひて、童女の胸鉤取らして、大魚の支太衝き別けて、波多須支穂振り別けて、三身の綱打ち掛けて、霜黒葛間耶聞耶に、河船の毛曾呂毛曾呂に、「国来、国来」と引き来縫へる国は、三穂の埼なり。持ち引ける綱は、夜見島なり。固堅め立てし加志は、伯耆国なる大神岳、是なり。「今は国引き訖えつ」と詔りたまひて、意宇杜に御杖衝き立てて「意恵」と詔りたまひき。故、意宇という。

謂わゆる意宇杜は、郡家の東北の辺、田の中にある塾、是なり。周り八歩許、其の上に木ありて茂れり。



国引き神話の網(蘭の長浜)と杭(三瓶山)

恋山のワニ

(仁多郡)

出雲の山間部、仁多郡(現在の奥出雲町)に伝わる説話はたいへん短いものですが、ここにも出雲のいにしえ人がなぜ?と思っただ不思議が神話となって残っています。

恋山のあらすじ

日本海にいたワニ(サメ)が、阿伊村にいた玉日女を慕って川を溯ってきたが、玉日女は大石で川をふさいでしまったのでワニは玉日女を恋(した)うばかりで会うことができなかった。なので恋山という。

神話の舞台

現在、鬼の舌震(ワニの恋が詠ったもの)と呼ばれる巨石の点々とする溪谷がこの神話の舞台です。人々にとつてこの景観は、人智の及ばない神々のなせるわざと感ぜられたのでしょう。そこから、その景観を説明する神話が生まれたと推測できます。

所造天下大神

あめのしたつくらしのおおかみ

この説話の主人公、所造天下大神とはどのような神なのでしょう。その名前の通り、天下をおつくりになった大神という意味で、オオクニヌシの神を意味します。『出雲国風土記』には、オオクニヌシの神が最も多く登場し、その活動が奈良時代の出雲のいろいろな地名の起源とされています。『古事記』『日本書紀』では日本の国造りの神として登場するオオクニヌシの神ですが、特に出雲では全域でその土地土地に信仰が深く刻まれていたことがわかります。オオクニヌシの信仰圏と出雲は密接に関係しており、『出雲国風土記』はまさに出雲の成り立ちを考えるうえで重要な史料のひとつであると言えるでしょう。

なぜワニか?

いっけんすると、海から遠く離れた奥出雲にワニ(サメ)が登場するのは不自然な気がします。しかし、中国地方の山間部ではサメは郷土料理の食材として今も食べられているのです。これはサメの体内には死後アンモニアが残り、腐敗しづらいからで、保管技術が未発達な古代では、内陸ではサメとは海の魚を代表するものだったのです。

この短い神話にも、奈良時代の生活が的確に反映されているのです。

風土記のつながり

この恋山に類似する伝承が、『肥前国風土記』の佐嘉郡(今の佐賀市)にもあります。こちらには嘉瀬川上流の世田姫と呼ばれる石神(巨石)に、海の神(サメ)が年に一度溯って会いに来るというものです。恋山の話も本来は海と山の神がであう話だったのかもしれない。

加賀郷・加賀神埼の伝承

(島根郡)

島根半島には風光明媚な海岸線が続きますが、『出雲国風土記』にはこの浜や島、あるいは岬についてのたいへん詳細な記載が残されています。これは、当時の人々にとつて、沿岸の漁業の舞台であったためと考えられ、加賀神埼とよばれた現在の松江市島根町の加賀の潜戸には、興味深い神話のこされています。

伝承

加賀神埼には窟がある。ここはいわゆる佐太大神がお産まれになった所である。御子神がお産まれになろうとする時、弓矢がなくなった。母神である枳佐加比売命が「わたしの御子が麻須羅神の御子ならば、なくなった弓矢よ、出て来なさい」と祈願すると、最初角の弓矢が流れ出た。これを投げ捨てると、次に金の弓矢が流れ出て来た。そこで「暗い窟である」といつて射通しなされた。このとき光輝いたので、加賀というようになった。

穴道の由来

(意宇郡)

現在の松江市穴道町、あるいは穴道湖に名前を残している地名穴道。この地名の由来も、『出雲国風土記』に伝えられています。

穴道の由来

穴道郷には所造天下大神命(オオクニヌシ)が、狩りで追いかけた猪の像が、南の山に二つある。一つは周り五丈六尺(二七尺)、もう一つは周り四丈一尺(二二トル)。猪を追う犬の像もある。石となっているが猪と犬以外のなものでもない。このように猪を追いかけたさまが残ることから、当地を穴道という。

神秘的な猪の像

この説話は、記載されているように大きくそして不思議な形をした石がもとになって地名となったというものです。そしてその石の由来が神の行為として説明されています。

垣間見られる出雲の習俗と、壮大な神話体系

加賀には『出雲国風土記』の記載どおりの長大な海蝕洞窟(加賀の潜戸)があり、この不思議な造形を説明した神話です。説話は、母神が御子の父神について予言し、そのとおりになると、母神は窟を弓矢で貫通させ、光り輝かせるといふ偉大な力を発揮します。このように、まず誓いを立てその通りになるかどうかで事の善悪や正否を判断することを誓約と呼びますが、加賀神埼の説話からは、古代出雲にも同じような習俗があったことが窺えます。

また、この神話は佐太大神の誕生の説話でもあります。佐太大神は現在の松江市鹿島町の佐太神社の祭神で、島根半島東部で広く信仰されていました。説話では「生まれた場所」としてしか登場しませんが、本来はこの佐太大神をめぐる、壮大な神話体系があり、その一部が加賀神埼に収録されているのです。このように、『出雲国風土記』からは、かつてそれぞれの地域が持っていた豊かな神話の一端を知ることができます。

出雲国風土記とは何か

このパンフレットで紹介する『出雲国風土記』とは、ひとことというところ、奈良時代の天平五年(七三三)に完成した、今の島根県東部、出雲国について記した地誌(地理を紹介した本)です。この『出雲国風土記』にはどんな価値や特色、魅力があるのでしょうか。

古事記・日本書紀と並ぶ 古代出雲の詳細な記録

今から約一二三〇年前の奈良時代の和銅六年(七二三)、全国六〇余りあったそれぞれの国に対して、その地方の地名の由来、特産物、古老の伝承などを調査、報告するよう命令が出されました。この命令に従って出雲国で編さんされたのが『出雲国風土記』で、命令の二〇年後、天平五年(七三三)二月三十日に完成しました。日本で記された古い書物には『古事記』(七二二年完成)や『日本書紀』(七二〇年完成)がありますが、それらに匹敵するほど古い書物が『出雲国風土記』を含む諸国の風土記なのです。また『古事記』や『日本書紀』が当時の政治の中心、近畿地方の貴

族の手によって編さんされたのと異なり、風土記は各国の現地で編さんされました。このため、風土記には『古事記』や『日本書紀』には記されていない地方の情報が、たいへん詳細に記されています。

失われた風土記

各国で編さんされた風土記も、平安時代には既にうしなわれてしまったようです。そして、現在とまったかたちでこのこっているのは『出雲国風土記』と、常陸国(今の茨城県・播磨国(兵庫県西南部)・豊後国(北部を除く大分県)・肥前国(佐賀県・対馬を除く長崎県)の五か国の風土記だけです。そして、このうち、出雲以外の四か国の風土記には脱落した部分があったり、現在に伝わるものが省略本であるなどして、『出

雲国風土記』だけが全国で唯一ほぼ完全な形で残っているのです。

出雲国造による編さん

また『出雲国風土記』には、ほかの風土記にはない特色があります。それは、編さん者が、都から派遣された役人である国司ではなく、出雲の豪族、出雲国造出雲臣広島という人物であることです。風土記は現地で編さんされたのですが、『出雲国風土記』については、とりわけ多くの地元出雲からの視点が盛り込まれています。このように、地方の視点から記述された奈良時代の書物はほかになく、『出雲国風土記』はかけがえない価値を有しているのです。



風土記編さんの経緯

都・朝廷

〈風土記撰進の命令の内容〉

- 一、地名に好ましい漢字を用いなさい
- 一、物産品目を報告しなさい
- 一、土地の肥え具合を報告しなさい
- 一、山川原野の名と、その由来を報告しなさい
- 一、古老が伝える土地の伝承を報告しなさい

713年
編さん
命令

撰上

諸国

『出雲国風土記』の完成は天平五年(733)で、唯一完成した年が正確にわかっています。

常陸：717~723年頃
播磨：715年頃
豊後：732~739年頃
肥前：732~739年頃

現存する五風土記



『常陸国風土記』
島根県立古代出雲
歴史博物館所蔵

『豊後国風土記』
島根県立古代出雲
歴史博物館所蔵

肥前国
(現在の佐賀県・長崎県
ただし舌岐・対馬を除く)

『出雲国風土記』の写本



『出雲国風土記』最古の写本 細川家本
慶長2年(1597)書写
(東京都 永青文庫所蔵)



『出雲国風土記』の写本
(右 岸崎氏本 個人蔵
左 日御碕本 日御碕神社所蔵)

『出雲国風土記』の原本は失われており、現在は写本の形でその内容が伝えられています。最古の写本である細川家本や日御碕神社所蔵の写本(日御碕本)が有名です。

出雲国風土記 地図





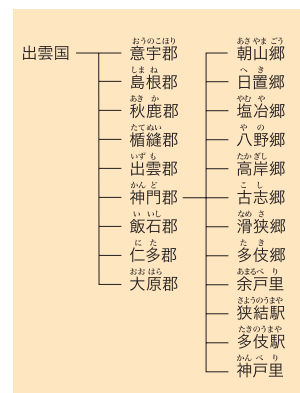
風土記に記された古代の出雲国

『出雲国風土記』の特色は、記載が整っていて、実際に計測した数値が多く書かれていることです。そして、記された場所について、郡の役所からの方角や距離も記されているので、当時の出雲国全体の様子が、手に取るようにわかります。

出雲国の行政区分

奈良時代、全国は六〇余りの国に分割されていました。今の島根県東部、出雲国もその一つです。出雲国はさらに九つの郡からなり、郡はそれぞれ四〜一の郷などから

国・郡・郷の構成 例は神門郡
(今の出雲市西部)



構成されていました。『出雲国風土記』には、このすべての郡・郷の名前と由来、そして所在地が記されています。奈良時代の国名は全てわかっています。各国の郡の名前やその下の郷の名前がすべてわかっています、さらにその場所が特定できるのは、出雲国だけなのです。そして、この時につけられていた地名は、その多くが現在でも使われています。

発掘された郡家

『出雲国風土記』は一冊の書物ですが、

記載もあります。これらは、奈良時代の文献としては『出雲国風土記』にしか見えないものです。

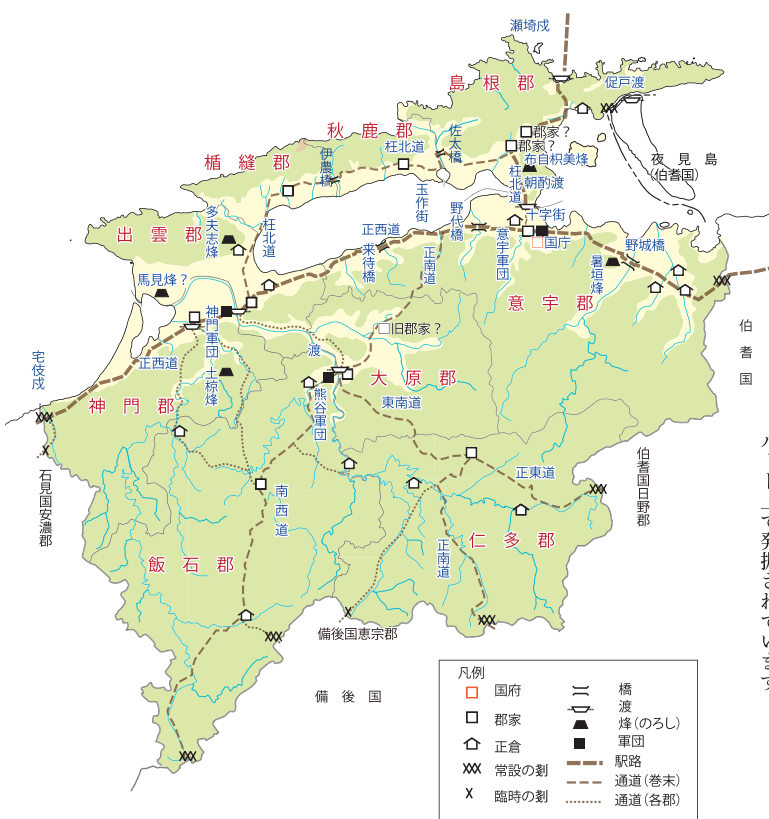
従来、奈良時代の道路は細く曲がりくねった道路と考えられてきましたが、近年、全国で大規模な直線道路が発掘さ

れ、道路が多数整備されたことが分かっています。『出雲国風土記』に見える道路網はこのような奈良時代の道路政策・道路整備を明確に叙述したものでした。

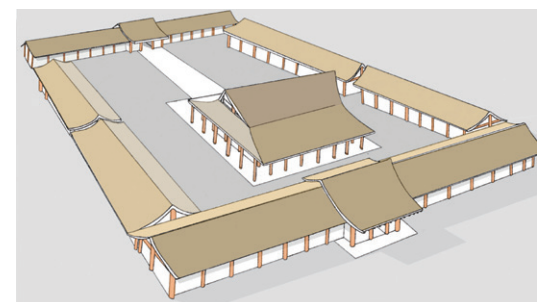
出雲国内でも、実際に幅九メートルに及ぶ切通しにした道路遺跡などが、想定される山陰道ルート上で発掘されています。



発掘された山陰道 (松江市松本古墳群)



『出雲国風土記』に記載のある施設と交通路



神門郡家の中心部復元図 (出雲市古志本郷遺跡)



豊かな自然と産物 人々の暮らし

『出雲国風土記』には山野・河川・池堤・浜や島などが約三四〇登場します。

山については郡家からの方角と距離が記され、

河については水源となる山が、また海岸の地形は、郡の東から西へ、

という風に書かれています。

そして、多くの地名が現在にも残っており、

現在のどこに当たるのかも推定されています。

風土記の山

『出雲国風土記』には約九〇の山の記載がありそれぞれに特徴がありますが、ここでは榑縫郡の神名榑山（現在の出雲市多久町の大船山）を取り上げてみます。

「峰の西に石神がある。高さ一丈あまり、周り一丈あまりである。道の傍らには小さい石神が百余りある。古老が伝えているには、アジスキタカヒコ命の後のアメノミカジヒメ命が多宮の村までいらつしやつて、タキツヒコ命をお産みになった。そのときお腹の中のタキツヒコ命に教えて「これか

らおまえを生むが、父親である神が正面にあたるここがふさわしい」とおつしやつた。石神はタキツヒコ命の依代だ。日照りの時に雨乞いをするとき必ず雨を降らせてくれる」

現在も大船山にはこの石神に推定されている大岩や小石神と思われる石群が、近くにはタキツヒコをお祭りしている滝もあり、古代の信仰の姿を垣間見ることが出来ます。

土地開発の物語

また、秋鹿郡惠曇浜条には次のような土地を開発した話も見えます。

邑美冷水。東と西と北は山でみなけわしく、南は海で広々とし、中央に沢があつて、泉が流れている。男も女も、老人も子供も、時節ごとに集まって、いつも宴会をする地だ。

これは奈良時代における男女の出会いの場である歌垣をしるしたものと考えられます。このような社会風俗についての記載があるのも風土記の特徴です。

風土記時代の産物

『出雲国風土記』には、政府から出された命令どおり、土地の産物の報告もなされています。登場する産物は、山野の植物が約一一〇種類、動物が約六〇種類に及びます。植物については薬草が多く、出雲の特色だったのではないかとされ、平安時代になると出雲国造出雲臣と同じ出雲を名乗る氏族から、有名な医師が輩出されます。

さまざまな産業



クロマグロ：『出雲国風土記』に志昆魚としてみえる



シラン：『出雲国風土記』に白枝としてみえる。地下茎は生薬になる

沐の忌玉」と記される玉を作っていたことが記されています。発掘調査によって、実際に忌部神戸の推定地で奈良時代の玉作の遺跡が確認されています。このほか焼き物の産地、製鉄をおこなった地域や砂鉄の採取場所なども記されています。

奈良時代の地方の産業について、国内のどこで行われたか明記する文献は少なく、『出雲国風土記』は当時の産業を知る上でも重要です。

人々が出会う場

島根郡の邑美冷水（現在の松江市大海崎町目無水）にも注目すべき記事が見えます。



邑美冷水での歌垣風景復元模型



榑縫郡の神名榑山（出雲市大船山）

出雲国風土記を作った人々

いずも こく そう いずものおみ
出雲国造 出雲臣

『出雲国風土記』を編さんした出雲国造出雲臣とはどのような人物だったのでしょうか。まず、国造というのは、奈良時代以前、六〜七世紀にかけて地方におかれた役職の一つで、その地域を取りまとめる豪族でした。六四五年の大化改新以後の政治改革のなかで、国造は名誉職になり、地方支配は中央から派遣された国司の役目になります。そのなかで、出雲国の出雲国造だけは、奈良時代になっても、地元の豪族たちの集団の中で一定の権威を有していたと考え

天平五年二月廿日勅造秋鹿郡人神宅臣
金太理
國造帶意宇郡大領外正六位上勲業出雲臣
廣嶋

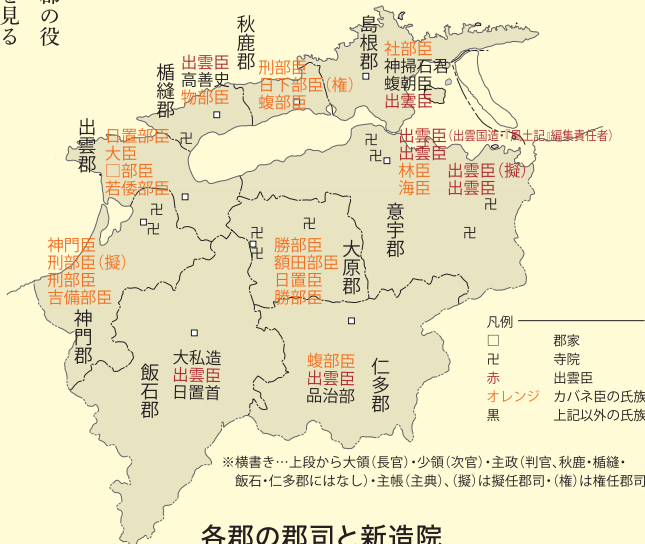
『出雲国風土記』(古代文化センター本)
巻末の国造署名

られています。
そのことがうかがえるのが『出雲国風土記』にみえる郡の役人である郡司の記載です。



出雲国の郡司たち

風土記を構成する各郡の記載には、郡の役人である郡司の署名があります。それを見ると、天平五年(七三三)における出雲国九郡の郡司だった氏族が分かるのです。これを見ると、出雲国造出雲臣の本拠地である意宇郡では六人中四人が出雲臣氏で、そのほかの四郡にも出雲臣氏が見えます。また、当時の有力者は姓の下にカバネと呼ばれる称号を持っていたのですが、出雲国内の郡司は多くが出雲



各郡の郡司と新造院

国造と同じ臣というカバネです。かれらも出雲臣と何らかの関係があった氏族と考えられていますので、出雲国の郡司はほとんどが出雲臣の関係者だったことになります。

このように『出雲国風土記』を読み解くことで、当時の政治状況も明らかにすることができ

出雲国の寺院と神社



郡司たちが建てた寺

『出雲国風土記』には、新造院と呼ばれた寺院についての記載もあります。それぞれの寺院について、「五重塔がある」とか「僧が一人いる」というような寺院の内容と、その寺院を建立した豪族(多くはその郡の郡司)が記されています。

奈良時代には全国的に多数の寺院が建立されたことが分かっていますが、だれが建立したのか、僧がいたのかどうかなどが分かる寺院は極めてまれです。「土地の有力者である郡司が地方寺院の主たる建立者である」という通説の根拠の一つは、『出雲国風土記』にあるのです。

出雲国の神社

もうひとつ、国内の神社が網羅的に記載されているのも『出雲国風土記』の著しい特徴です。これは、たとえ全国の風土記が残っていても、

『出雲国風土記』に特徴的な項目だったことが想定されます。

全国の神社がいつ成立したかについては不明な点が多いのですが、少なくとも官社と呼ばれ、国家に認定された神社は全国的にみると八世紀以降九世紀にかけてにしたいに増えていったと考えられています。そのなかで、出雲国の官社だけは、『出雲国風土記』の記された七三三年に、ほとんどすべての官社が登録を終了して、その数もきわめて多いのです(一八四社)。出雲は奈良時代から神々の国であったと言えます。

さらに、出雲国内では出雲郡を中心に、奈良時代の神社ではないかとおもわれる遺跡が調査されています。また、風土記を読むと、当時杵築大社とよばれた出雲大社は、現代同様の巨大な本殿を持つ神社群であったことが推定できます。全国的にみても早くに確立した出雲国の神社。この謎を解く鍵も『出雲国風土記』が握っているのです。



発掘された奈良時代の神社復元模型(出雲市青木遺跡)。出雲郡の神社、伊努社・美談社・県社などに推定される